

” Reading the Mind in the Eyes” テストの実施法に関する検討

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2021-09-27 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 坂田, 浩之 メールアドレス: 所属:
URL	https://osaka-shoin.repo.nii.ac.jp/records/4591

“Reading the Mind in the Eyes” テストの実施法に関する検討

坂田 浩之

臨床心理学専攻准教授・カウンセリングセンター相談員

要約

本研究の目的は、メンタライジングの測定に用いられる“Reading the Mind in the Eyes”テストの質問紙版の妥当性を検討することである。大学生の女性 28 名に対して、写真を 1 枚ずつ提示して回答を求める原法による“Reading the Mind in the Eyes”テストと、質問紙法による“Reading the Mind in the Eyes”テストを実施し、この 2 つの方法の得点を比較した。その結果、一致率と相関係数の高さから、質問紙法による得点が原法による得点と同一であることが示唆された。この結果から、質問紙法による“Reading the Mind in the Eyes”テストの妥当性が支持された。

キーワード：“Reading the Mind in the Eyes”テスト、質問紙法、妥当性、メンタライゼーション

I 問題と目的

メンタライゼーションとは、自己と他者の行動を、感情、願望、目標、態度などの精神状態の観点から省察 (reflect) し、理解することであり、メンタライジングとはその能力のことである (Fonagy et al., 2016; Luyten & Fonagy, 2015)。メンタライゼーションの概念は、Fonagy らによって、乳児のアタッチメントに関する実証的研究と境界性パーソナリティ障害に対する精神分析的研究から形成され (Fonagy & Allison, 2012)、1900 年代初頭に定義され、以後その定義は次第に変化し、概念の適用可能性が広がってきている (Davidsen & Fosgerau, 2015)。メンタライゼーションの概念は、精神分析に基づきながら、科学的根拠によって妥当性を支持され、また、臨床的なプログラムへの効果的な適用が模索され、この概念の導入により新しい効果的な治療の開発が促されてきた (Choi-Kain & Gunderson, 2008)。

また、メンタライゼーションの概念は、共感、マインドフルネス、心理学的志向性 (Psycholog-

ical Mindedness)、感情意識 (Affect Consciousness) と重なりをもちながら、これらをつなぐものである (Choi-Kain & Gunderson, 2008)。そして、メンタライゼーションは、感情調整の発生と首尾一貫した自己感の発達において中心的な役割を果たしている (Fonagy et al., 2002)。つまり、メンタライゼーションを獲得したというとき、それは単に自己や他者の心的理解が可能になるということだけでなく、情動調整や注意の制御も含めた、われわれが通常用いる意味での「主体」が成立したことを表している (池田, 2013)。したがって、メンタライゼーションという概念を用いることによって、共感、マインドフルネス、心理学的志向性、感情意識などの概念によって研究されてきたことを統一的に理解して、なおかつ研究知見を治療的に活用しやすくなることが期待される。現在において、メンタライゼーションの能力、すなわちメンタライジングの欠損は、境界性パーソナリティ障害をはじめとするパーソナリティ障害のみでなく、統合失調症、強迫性障害、心身症、摂食障害、パニック障害、抑うつと結びつけられ

ている (Fonagy et al., 2011)。その他の心理臨床的な問題に関しても、メンタライジングの欠損という観点から理解していくことは、より適切な心理療法を模索する上で有望である。

このように、様々な心理臨床的な問題を統一的に理解し、解決する観点として有望なメンタライジングを妥当かつ合理的に測定できる方法確立することは大きな意義があると考えられる。先行研究において、メンタライジングの測度としては、“Reading the Mind in the Eyes”テスト（以下、RMET）が用いられている。RMETは、成人の社会的感受性の測定法として開発され、顔の両目付近のみの写真を4つの感情語とともに提示し、写真の人物が表す感情を選ばせるテストであり、正答数と自閉症傾向の間に負の関連があることが示されている (Baron-Cohen et al., 2001)。RMETを用いてメンタライジングを測定した研究として、たとえば All et al. (2008 / 2014) では、境界性パーソナリティ障害の診断基準を満たす、またはBクラスターではないパーソナリティ障害を持つ群の方が、パーソナリティ障害のない群よりRMETにおいて低い成績を示したことが明らかにされている。また、Gervinskaite-Paulaitiene & Barkauskiene (2015) では、外在化問題のある13—17歳の青年は統制群の青年に比べ、RMETの得点が低いことが明らかにされている。

以上より、様々な心理臨床的な問題をメンタライジングの欠損という観点から理解することは、より適切な心理療法を模索する上で有望であり、メンタライジングの測定にRMETを用いるのは有効であると考えられる。しかし、36枚の写真を1枚ずつ提示して回答を求める原法のRMETは個別の実施となるため、時間とコストの面から大規模調査に用いるのが難しい。そこで本研究では、原法によるRMETと質問紙法によるRMETの結果を比較することにより、質問紙法によるRMETの妥当性を検討することを目的とする。

II 方法

1. 調査参加者

近畿圏のO女子大学に所属する大学生28名（女性のみ；平均年齢20.0歳，SD = 0.9）が調査に参加した。

2. 調査時期

調査は、2017年6月に実施された。

3. 調査内容

RMET 吉川左紀子（京都大学）・野村光江（関西看護医療大学）が作成し、Adams et al. (2010) において使用されたアジア版 Reading-the-Mind-in-the-Eyes Test を使用した。調査対象者に、36枚の人の両目の部分のみの写真をグレースケールで提示し、あわせて各写真につき感情を表す4つの言葉を選択肢として示した。選択肢は、写真の左右の上隅の上に1つずつ、写真の左右の下隅の下に1つずつ配置された。そして、4つの選択肢のうち、写真の人が示す感情として最適なもの1つを選択することを求めた。両目部分の写真は全て感情を表すものであった。また、選択肢の感情を示す言葉は、うきうきしている、いたわっている、いらだっている、うんざりしている、怖がっている、動転している、威張っている、不愉快に思っている、ふざけている、動揺している、欲している、確信している、主張している、面白がっている、リラックスしている、皮肉な気分である、心配している、親しげな気持ちを抱いている、ぎょっとしている、空想にふけている、じりじりしている、警戒している、すまなっている、落ち着かない気持ちである、元気をなくしている、気落ちしている、ほっとしている、恥づかしがっている、興奮している、敵意を抱いている、ぞっとしている、気を取られている、用心している、悔やんでいる、気のあるそぶりをしていない、無関心である、きまりが悪い、疑いを抱いている、決意を固めている、期待している、脅している、がっかりしている、落ち込んでいる、非難している、内省している、励まそうとしている、考えにふけている、同情している、疑っている、愛情

を持っている、感謝している、皮肉を言っている、ためらっている、支配的である、気がとがめている、困惑している、混乱している、哀願している、満足している、申し訳ないと思っている、挑戦的である、好奇心を抱いている、物思いにふけている、信じられないと思っている、興味を持っている、不安に思っている、元気づけている、内面を見つめている、恥じている、真剣になっている、当惑している、心配そうにしている、お手上げである、不信感を抱いている、不思議に思っている、神経質になっている、迷っているであった。本研究で使用した質問紙では、1ページにつき4枚の写真を配置した。

4. 手続き

写真を1枚ずつ提示して回答を求める原法と本研究で使用した質問紙法のRMETの結果が同じであることを確認するために、原法と質問紙法でRMETに回答してもらった。原法に関しては、個別に調査室に参加者に来てもらい、調査者と1対1の設定で行った。モニターの大きさが25.5cm×14.3cmのノートパソコンの画面に13.7cm×5.4cmの大きさで目のみの写真を提示し、指差しあるいは口頭で、感情語を選択してもらった。質問紙法に関しては、集団あるいは個別に調査者が参加者に質問紙を配布し、その場で回答を求め、その場で回答済みの質問紙が回収された。回答時間はともに約5分であった。なお、順序効果を考慮し、原法と質問紙法の施行順に関してカウンターバランスを行った。また、原法による実施と質問紙法による実施の間には4日以内のインターバルを挟んだ。

5. 倫理的配慮

回答に際しては、研究の目的が集団の傾向を把握するものであること、調査の結果は統計的に処理され、個人の結果が問題とされたり、評価されたりすることはないこと、結果が研究の目的以外に使用されることはないこと、調査への参加は自由意思によるものであること、調査に参加しないことで不利益が生じることは一切ないことを原法の実施前に渡す説明書、および質問紙法のフェイ

スシートに記載していた。説明書とフェイスシートに記載されたこれらの記載事項に同意する場合にのみ、調査に参加してもらった。また、説明書とフェイスシートに記名欄を設けず、無記名で回答してもらった。その代わりに各参加者にIDを割り振り、説明書とフェイスシートにはそのIDを記入してもらった。そして、質問紙と原法によるデータのマッチングは、そのIDを用いて行った。

III 結果と考察

原法と質問紙法によるRMETの回答および得点の比較

まず、参加者ごとに原法における各回答と質問紙法における各回答の一致率を算出した。その結果、原法と質問紙法の回答一致率は74.0%であった。したがって、原法と質問紙法の回答は概ね一致すると考えられる。また、原法、質問紙法ともに各写真に対する正答を1点、誤答を0点として、全36問に対する得点を合計してRMET得点とし、両得点間の相関係数を算出した。その結果、両法による得点間相関は $r = .76 (p < .001)$ であった。したがって、質問紙法によるRMET得点は、原法によるRMET得点と概ね同じのものであると考えられる。

まとめと本研究の限界、今後の課題

本研究において、原法によるRMETと1ページにつき4枚の写真を配置した質問紙法によるRMETの回答および得点が同一であることが示された。この結果は、質問紙法のRMETの妥当性を支持するものである。

本研究の限界と今後の課題は次の通りである。本研究は、大学生の女性のみデータを用いている。したがって、本研究の結果が他の年齢や性に一般化できるかどうかについてはさらなる検討が求められる。

このような限界や課題はありつつも、本研究において1ページにつき4枚の写真を配置した質問紙法によるRMETの妥当性が支持されたこと

は、メンタライジングに関する大規模調査を容易にし、メンタライジングに関する研究を進展させる道を拓いたという点において、意義があると考えられる。

引用文献

- Adams, R. B., Rule, N. O., Franklin, R. G., Wang, E., Stevenson, M. T., Yoshikawa, S., Nomura, M., Sato, W., Kveraga, K., & Ambady, N. (2010). Cross-cultural reading the mind in the eyes: An fMRI investigation. *Journal of cognitive neuroscience*, *22*, 97–108.
- Allen, J. G., Fonagy, P., & Bateman, A. W. (2008). *Mentalizing in clinical practice*. Washington, DC: American Psychiatric Publishing. 上地 雄一郎・林 創・大澤 多美子・鈴木 康之 (訳) (2014). *メンタライジングの理論と臨床 — 精神分析・愛着理論・発達精神病理学の統合*. 北大路書房.
- Baron-Cohen, S., Wheelwright, S., Hill, J., Raste, Y., & Plumb, I. (2001). The “Reading the Mind in the Eyes” test revised version: A study with normal adults, and adults with Asperger syndrome or high-functioning autism. *Journal of child psychology and psychiatry*, *42*, 241–251.
- Choi-Kain, L. W., & Gunderson, J. G. (2008). Mentalization: Ontogeny, assessment, and application in the treatment of borderline personality disorder. *American Journal of Psychiatry*, *165*, 1127–1135.
- Davidson, A. S., & Fosgerau, C. F. (2015). Grasping the process of implicit mentalization. *Theory & Psychology*, *25*, 434–454.
- Fonagy, P. & Allison, E. (2012). What is mentalization?: The concept and its foundations in developmental research. In Midgley, N., & Vrouva, I. (Eds.). *Minding the child: Mentalization-based interventions with children, young people and their families* (pp. 11–34). New York: Routledge.
- Fonagy, P., Bateman, A., & Bateman, A. (2011). The widening scope of mentalizing: A discussion. *Psychology and Psychotherapy: Theory, Research and Practice*, *84*, 98–110.
- Fonagy, P., Gergely, G., Jurist, E. L., & Target, M. (2002). *Affect regulation, mentalization, and the development of the self*. New York: Other Press.
- Fonagy, P., Luyten, P., Moulton-Perkins, A., Lee, Y.-W., Warren, F., Howard, S., Ghinai, R., Fearon, P., & Lowyck, B. (2016). Development and validation of a self-report measure of mentalizing: the Reflective Functioning Questionnaire. *PLoS One*, *11*(7), e0158678. doi:10.1371/journal.pone.0158678
- Gervinskaite-Paulaitiene, L., & Barkauskiene, R. (2015). Externalizing Problems and Mentalizing in Adolescence. *14th European Congress of Psychology* (Milan, Italy). Retrieved from https://www.researchgate.net/publication/280009639_Externalizing_Problems_and_Mentalizing_in_Adolescence (September 29, 2016.)
- 池田 暁史 (2013). 愛着理論とメンタライゼーション. *精神分析研究*, *57*, 12–21.
- Luyten, P., & Fonagy, P. (2015). The neurobiology of mentalizing. *Personality Disorders: Theory, Research, and Treatment*, *6*, 366–379.